

# 永野小学校・学校だより(7月)

## 育てるといことは命に寄り添うこと

副校長 宮坂 優子

先日、職員室に2年生の子どもが、「シャベルを貸してください。」と言ってきました。「何に使うの？」と尋ねたら、「ザリガニが死んだので、埋めてあげるの」と答えました。数日後、同じ子どもたちが、またシャベルを借りにきました。理由を聞くと、またザリガニが死んだというのです。どうして死んでしまったのか、そして、どうしたら死なないように飼えるかを考えてお世話をしようねと話しました。その後、気になったので、そのクラスに行ってみました。クラスの水槽は、ザリガニの立派な家になっていました。担任に聞くと、子どもたちは、みんなで話し合い、水がいけなかったという結論に達し、水について調べ、水を取り替えたそうです。ザリガニが住みやすいようすみにしたのです。一匹になってしまったザリガニですが、そこには、子どもたちの優しさが感じられました。3年生は、理科の学習で蚕を育てています。飼い始めの頃は、小さくて桑の葉も少ししか食べなかった蚕も日増しに大きくなり、桑の葉もたくさん食べるようになりました。蚕を毎日見ている子どもたちは、そのうちあることに気が付きました。同じ大きさからスタートした蚕にだんだんと差が出てきたことです。「どうしてこんなに大きさに差があるのだろうか？」じっくり観察していて答えが出ました。葉をたくさん食べる蚕は大きくなるのです。その後、桑の葉採りを担任任せだった子どもたちも自分たちで桑の葉を採るようになりました。木の下を採り尽くしたら、ちょっと木登りをし、木の上を採り、さらに他の木を探し、毎日一生懸命えさをやっています。先日、3年生の教室に行ったとき、「先生、この蚕見て！大きいでしょ。えさを食べるとき、音を立てて食べるんだよ。背中もつるつるしているんだよ。」と愛おしそうに蚕の背中をなでて話してくれました。その子は、始めの頃、蚕が気持ち悪いものに思えたそうです。

学校では、飼育活動を生活科や理科で行います。子どもたちは育てるとい営みを通して、命に寄り添うことを学んでいるのです。どんなに小さな生き物にも、わたしたちと同じように命があり、痛みがあるということに気づかせていきたいのです。そして、小さいもの、自分から、苦境を訴えられないものへいたわりや思いやりの心をもって欲しいのです。毎日、えさをあげたり、水をあげたりしながら、生き物の素晴らしさに気づき、さらに愛おしさを募らせていく中で、生き物に話しかけられる感性がもたらどんなにすてきでしょう。死んだザリガニを「ごめんね。」と言って埋める永野の子どもたち。倒れてしまったバケツ稲を植え替え、まだ土が少なくてかわいそうと手足を泥だらけにして時間を忘れて頑張っていた5年生。そんな子どもたちの感性を大事にしていきたいですね。

梅雨真っ只中の6月23日(月)には、全校でプール開きを行いました。水泳学習が安全で楽しい学習となるように、そして、一人ひとりが自分の目指す目標に達成できることを願って、大きな【安全・協力・努力の鍵】を児童代表の1年生に渡して水泳学習がスタートしました。残念ながらプール開きをした日は、天候が悪くプールには入れませんでした。梅雨が明ければ夏本番。プールから元気な声と力一杯の水しぶきが上がることでしょ。